

## 円成寺大日如来坐像の造像工程の研究 —康慶と運慶の接点—

藤曲隆哉（東京藝術大学）

本研究は円成寺大日如来坐像（1176年・運慶作）（以下円成寺像という）の復元模刻制作と3Dデジタルスキャニング計測データ（以下3D計測データという）を併用してその造像工程について考察を行ったものである。

円成寺像の頭頂部には2片の小材が矧ぎつけられている。この小材の矧ぎ目は約4度後傾しており、その矧ぎ面が当初造り始めに用意された体幹部材の木口面であることを模刻制作と3D計測データを用いて検証し指摘した。

3D計測データを用いた検証から、近年康慶工房の作品との指摘がされている浄瑠璃寺大日如来坐像（以下浄瑠璃寺像という）を円成寺像と同様の膝張りへ拡大し、ほぼ同寸法とした正中断面図は約4度後傾させることで円成寺像の正中断面図と殆ど重なることが解った。また、瑞林寺地藏菩薩坐像（1177年・康慶作）（以下瑞林寺像という）も円成寺像と傾きを同一にすることで正中断面図が重なり、正面図も傾きを同一にしたとき円成寺像、瑞林寺像、浄瑠璃寺像のシルエットや各パーツの配置関係が殆ど重なることが解った。そこから円成寺像、瑞林寺像、浄瑠璃寺像は同様の図面を基に制作されていることを指摘した。

また円成寺像は造像の過程で、体幹部材の像底面を切り取り、約4度後傾させ制作されたこと、そうした過程において上半身を再構成し、腕部の配置関係や条帛の配置関係を造り直し、条帛を別材としたことを指摘した。

論証の結果、円成寺像が父康慶の作品と相似形の図面をもつことを指摘し、運慶が円成寺像の制作において康慶工房の図面を利用しながらも、造像過程のなかで体幹部材を約4度後傾させることで自身の大日如来像へと再構築した可能性を明らかにした。

円成寺像には運慶自筆の銘記が台座に認められる。そこに記される「大仏師康慶 実弟子運慶」と作者名を併記する意図は図面の継承にあるのだろう。また、その銘記によって知られている、約11か月と他の像に比べて7か月あまりの長い期間を要して制作されたこと理由は、円成寺像の造像過程の中で運慶が試行錯誤を行った結果ではないだろうか。円成寺像は像底面を切り取り、角度を変えることで当初用意された図面とは異なった大日如来像の姿勢を獲得している。それは後の運慶の大日如来像に共通してみられる反り身の姿勢であり、像自体の奥行が広がった造形へと変化を遂げている。この大日如来像の造像過程の中に、その後の運慶作品である願成就院阿弥陀如来坐像（1186年）や浄楽寺阿弥陀如来坐像（1189年）の様な体幹部に奥行を持たせる造形意識の萌芽と鎌倉新様式へと導く飛躍がここに認められるのだろう。